倫陽記 廿五

和書門 類
二九三一一 號
二三八 函
二 架
二〇 冊

内閣文庫
和書 類
二九三一一 號
二〇 冊
一七五 函
一 架

地七〇

内閣文庫
番號 和 29311
冊數 20 (20)
函號 175 161

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

閣
100

国立公文書館
National Archives of Japan

備陽記巻第三十五

国立公文書館
National Archives of Japan

備陽記之内覚書

目録

一 寛文六年九月　光政公横目共被仰聞事
一 輝政公御代執権若原右京中村主殿両家傳記
一 伊木豊後　秀忠公ヘノ披露状御返事ノ写之事
一 石丸雲微事其外覚書之事并吉川道喜事
一 今川了俊ノ咄之事
一 伊木家ヘ太閤秀吉公書状之写
一 邑久郡虫明八景之詩之事　荒井筑後守作
一 寛保二壬戌歳十月六日関東筋所々御普請御手傳之事

日本政府図書
内閣文庫
内閣文庫
内 一一〇一二號

一 寛保三年癸亥閏四月十二日被　仰聞之事

一 継政公三ツ物之事

一 継政公瀧御振被遊時大森大明神へ神納哥之事

一 寛保元辛酉暮　狂哥之事

一 寛保三癸亥ノ歳十月被　仰出之事

一 寛保三癸亥歳十一月一条様ヨリ御寿姫様ニ御結納之事

一 御巡見御国目付之覚

寛文六年九月　光政公御申聞之覚

一 此度横目共に申付趣意を皆〻少も得心さすへき為申聞
よるや悪しくして横目役ハ国家の仕置横道に紛るゝを見
出する役也

一 只今迄古出着共ハ主家の用ル役人ならハ不成云我か為
悪くれと思ふ者ハ一人もなきとても不思ニ独共為と存る所
は人ニ害為ニ不筆之方抱之是ハ御為と主家を尽し大
方ハ利ニ害ニ無理なく為ニ筆事ハ本紀と不得又不
気ん而ても[illegible]面ニ此ニ害ニ悪ニあ迄ハ[illegible]皆
我為と成る所自己此度を先ニ而も能得心して面々の事

為と思ふ處悪敷の所ハ横目たる足輕仕りて我共ニ少し
不及申其者ニ而申附遣すに於てハ甚可為我等不届ニ而
能様之人ハ見立遣しうち内々是ハ無之其者も遣と知てハ
役ハ奇特とて猶右之段何も尤く其者ハ横目たる何事か
申付た面々の方より申候又横目も不慥事成とも甚
者の心得も成りよわれハ早く申付上ハ平和し相
叶ひ申事

一 無面々職ニ付能心懸情を出し申事ハ人々の勤所
なりしかも不慥なとハ甚悪白遣ひかるうちしれとも当家の
為を本として其職を勤所あるくハ道るに申さるると思

ハれハ子細を仕失候ハ組々のうちよりひとハれ代官郡奉行ハ
民此ニ於てハひそれ町奉行ハ町人のうちよりひとれ此外其役々
小身の輩不定に而いつも申付也かくよれハ当家の為に不
為ニ而能熟申事や

一 評定場ニ而も不及云常ニも評定ニ出る面々ハ何れも
先心を請め其事を知りて其後又右ニ上て熟談ニ而ハ何ニよらす
秘密事とハ不残思ひ満足とて猶子細ニ右ハよらす皆の者
ともハ落と無と知らるへく於事ハ言語なる人ハ一旦熟し
き事ハ皆道や君子の上まて遣ハ身くとも浅からぬ時ハ甚
ことを申く段を何も満足然るへく此方を能心得可被仕て

我を立る僻心を捨て立大事を携あしくならぬ是非
一の大悪なるや此僻心くしハ其者諸事の裁判ならぬ能
了簡も能くて不得や
一 伊賀猪右衛門ハ諸役人の中ニ而能く何も心ニ而其職ニてハ奉
きれも同前とする所ニ依ハ道可為て同前とする所を
僻心私を捨る誠を以主家の為とする所を神妙ニ存候 又ハ
見へも異見侭にも心より越之此事能用心てあるへき也
右之趣何も相守候て能存心て仕組合ニあるへき事ハ之
とも者拵不寧を存知者自然てあらぬ事も人ハ的を射る
迷ふ跡異之ハ中ニ不為候とて脈を存不及にしもかゝつてぬ道も
異成様しひてならハ異を心さしてさ人あしかり不急ニ神妙
ゆきも成様りんと出不急ハ役義を存事 可相守候以上
寛文六九月日
一 先心を正しく義理を明らかに立る事を本として其職を立
相勤之
一 寛弘おして人の言を評論し權高く無之様こそ相守
能やうニて相勤可申事
一 然賞の有大義然者とし家帯なきやうにて相勤事

輝政公之御代執權若原右京中村主殿両家之傳記

大守取立若原右京中村主殿至ラサル旼ニハ奢トヱフ執權當職倭奸
無シテ四民和順シ他國ヨリ此家ヲシタウ是大守ノ御心意明ナリ
ト謂ツヘシ中ニモ右京ハ當家之普代同勘解由其妹ヲ右京家
ノ者嫁シテ其子也是ヲ舅ト号シ大守ヘ仕フ利根聡明ニシテ
立身ヲ望ミ家ヲ出外ニ仕ヘテ貳百石ヲ領ス本知ニテ帰参蘭ヶ原
ノ乱発ニ黒母衣ノ使番十二騎之内一騎不足大守若原弼惣
未武功ナシ汝等カ内ヘ可入ヤ否ヤ大将御目利之上ハ奉
畏ト云々然ルニ子ノ九月十五日青野原ノ戦場ニ於テ武功場
負ノ使番弥惣ヘ一騎ニ目ヲ附ル是武辺ヲ越レン事ヲ患

而ナリ杲而弥惣手ニ逢同役石黒甚内云今日若輩ノ汝
ハシレノ十一騎働アリ予未手ニ逢ハス自害セントト云弥惣云
サスカノ石黒氣短ナル事ヲ申物カナ騎馬セヨ我汝カ手
ヲ引シ石黒カ云思フニ先手之味方道ヲフサクヘシ弥惣吾
ニ任セヨトテ乗立道ヲ遮ル味方ノ陣々ニテ羽柴三左衛門
御先手ヘ使ナリトヨハシレハ道ヲヒラク是池田福島ノ両手
今日ノ御先ナレハナリ即石黒甚内高名弥惣モ今朝
ノ脇ヲ合テ武功誉ナリ
一日後藤又兵衛明石掃部小倉作左衛門姫路ニ登城
御守殿ニ押太鼓數々アリ後藤云當家旗本ノ押太鼓
何人司ルヤ折節ノ若原右京其縁カハヲ通ルニ三士呼カケ當家
御旗本ノ押太鼓兼リハ何人ソヤ若原言下ニ大守旗本之
押太鼓并ニ諸手ヘ某下知而割渡ス明石問御旗本
ノ武者奉行ハ誰ソヤ若原答テ旗本之武者奉行某
兼リ相言諸法度物見諸手ヘ申渡ス小倉問云御
家ノ陣場奉行ハ誰ソヤ若原答テ當家ノ陣場奉行
某奉行其手々ニ陣場ヲ割渡ス處勿論ナリノ三士ノ御
尋是迄ナリヤ惣テ此土ハ海陸西国ヨリ京都ヘ道筋且
大坂秀頼御若輩ニシテ諸牢人ノ集リ所関東ヨリ御内
存行末難計輝政先手旗本集勢一切ノ備配リ凡テ

三ケ国ノ國法御不審アラハ某ニ問給ヘ三士手ヲ束子テ
無言ス召ニ仍テ若原席ヲ立三士云若原度量ナルカナ推
参成カナ悪キ仕形ナルカナ若原働ハ去ル慶長五年関カ
原一陣迄ナリ此三士ノ前ニテ過言ト可謂ヤ後藤云誠
若原如此仕形無禮云ヽ無物然レ𪜈彼ガツラタマシイヲ手ノ
内ニ握リ込ル氣サシ此御家中三人ノ目利上手ナルカナト
ソ太守遠行ノ後上使トシテ安藤右京亮船越茂助姫
路ヘ参向若原右京中村主殿執權是非條數ヲ以御穿
鑿ニ仍而池田之一門家老物頭登城若原右京姫路ノ
城御殿守ヘ被召出第一右京身ニテアテ四千石之領知ヲ以テ
騎馬ヲ百騎召抱ル処實正也小身ニテ如斯之如何成儀
欤若原謹テ上意ノ如ク心掛牢人以来輝政ヘ直参ト号
騎馬百騎スグリ立自分ニ召置所實正也輝政當国ヲ弁
領段々御加増依之輝政内存此土ハ海陸其外東ヨリ御
心持アル國ナリ國法某一人ニ申付ル所歴然也依之小身ニテ
難成加増有時ハ譜代ノ歴々可恨カ上納ヲ五万石ノ代官
ヲ心ニ任セ加増ト存可計輝政内意明鑑也依之無子
細右之通歴然也第二輝政内室ハ公ノ御女其ノ公達ハ
御孫也右京奥方公達ニ對シ無禮處外ノ仕形如何ナル
故カ是非ヲ聞ン若原言上上意ノ如ク輝政内所公ノ

御血脉勿論也奥方結搆過奢アル時ハ家ノ破幼息以然
也某無遠慮可相討内意ニ依テ乍恐示し奉ル所歴然也
武列利隆ハ惣領是別腹也左衛門督忠継當腹之愛
子是早世其次々公達動モスレハ若輩ノ驕奢出ル事ニ物々ニ
示し奉行所輝政ノ内意ニ仍テ別ニ如何子細アランヤ等三
池田ノ一門ノ歴々ノ家老ニス子ノ下ニ見下しロヲ明サセス已一
人ト振舞フ無礼奢之咎如何若原言上上意ノ如ク出羽
守ハ池田ノ惣領一城之主タリ其ノ外伊木荒尾日置森寺
土倉等或ハ城主郡主ニ歴上ル所歴然也如此ノ一門普代
之歴々國ノ仕置諸公事ニ可召仕ハタハリアレハ勿論何事ク
是ニしカレ家一門ニテソタチ自タル片ノ口着モ甚ハタハリナし依之
輝政国法軍法某一人ニ申付ル所歴然也何ノ子細カ有ン
于時末座ヨリ丹羽山城進出上使ノ御前也右京仕形狼
藉也トテス若原眼ヲ見出しアレ徳入無禮トハ如何ニ昨今
輝政御在世ニ汝コトキ者ト席ヲ同フセス今更如此ノ仕形
是ヲ以無礼處外ト云ヘし甚席ヲ忽サレト云ニ丹羽無言ス
時山城ハ信長公ヨリ池田家ヘ御付人也武道誉ノ士中須
子細アリテ牢人浅野家ニ仕後池田ヘ帰叅一須剃刀
髪法名ヲ徳入ト号依之若原徳入ト唱フヘしトナリ右若原
御穿鑿之條数申披キ相違し姫路ヲ改易中村同

断申披キ也難波ノ時ハ切腹ニ公儀究シトソ慶長十九
年寅ノ冬ニ大坂御発向若原右京牢人ニテ自分之騎馬
百騎召連御旗本ノ大先ニ備ル是或ハ御内意ニ仍テ
也然ル所語テ鉄炮ノ薬ニ火縄ノ火移リ其備サワキ立
上聞達其若原誰ノ免ヲ得テ如此ノ仕形狼藉也ト御
機嫌悪シクソレヨリ流浪藤堂和泉守高虎卿ヨリ牢人
分ニ一万石ノ禄ヲ以招玉フ其内京都ニ於テ病死其子
孫テ今藤堂家ニ仕フ若原ヲ見シ人忠時ニ語ルヿトリセメ
タル大兵ハ面ニ人サレ指ニテ押込程ノ黒痘ノアト数々アリ代
月半頭長刀好人躰イカツニ見エテ言語分明也トソ

一中村ハ池田家ヘ帰参シ中村主殿ハ南泉堺之匠也池田
家ヘ仕ヘテ朝鮮之役ニ水子ナリ大志アリテ本船ニ数ノ桃灯ヲ
入置其船頭入ホカノ生附出ルヿヲ嫌フ仍之津々浦々ニテ中村
九郎右衛門ト名乗リ自カラ海上ニ其名ヲ顕不然ニ名護屋
ノ湊ヘ夜入レ事ヲ願日ヲ待暮ス夜ニ入用意ノ桃灯ヲ数
々火ヲ明シサヽメキ渡リテ湊ヘ入恰万燈之如太閤秀吉公上
覧何レノ船ヤ羽柴三左衛門船其船頭ハ中村九郎右衛門
言上美々敷舟飾リト大ニ御感中村名ヲ上ル太守禄ヲ与
テ国政ヲ司シム三ケ国ノ政道若原中村其比播磨ノ俗
小歌ニ歌フ右京主殿ニ及モナイカ責テモ中村分別原案ノ
○ナリタヤ殿サヽニト

士トノ沙汰列ソ人集忠時ニ語太守輝政公中村ヲシテノ沙汰
州検地一日中村或時山田ヲ見廻ル其坂ノ峠ニ立テ此上ヨリ
東ノ方ハ上田也是ヨリ西ノ方ハ見ルニ不及下田ナル土也則下田
ト究ル某而其所下田也今テニ語テ其所ノ俗中村検地ト言
傳ヘ扱モ中村殿ハ権者ナルカナ見ズ聴ズ他国ノ検地ヲ上下ニ分
玉フ末世ノ明鏡ト云リ忠時思リ甲州流ノ山ノアナタノコナタ
陰陽之程ヲ中村會得シケルヤ常躰ノ人トハ今モ思ハレ
ズ若原中村氏ニ於テ義ハ色ニ替ル所内心慈悲有テ邪智ナ
シトニ中村立身ヲ聞テ南泉ノ親類姫路ヘコソツテ身エヲ
望ム中村一人モ不取次金銀ヲ与テ其在所ヘ戻ス中村云リ我

冥加ニ仍テ恩禄ヲ重テ既ニ三ケ国ノ執権タリ我時ノ威勢
ニ乗而豈他國ノ下民ヲ士官ニシテ太守ヘ仕ヘ禄ヲ喰センヤ
是本意ニアラスト也其心意無欲ノ仕形ト謂ツヘシ

池田家老伊木豊後披露状本紙備前ノ伊木家
ニアリ

御書謹而頂戴仕候　内府様為御設備前美作両国
ヘ御人数被遣御仕置等可被仰付旨ケ様ナル目出度御
吉左右御座有間敷候古ヨリ如此可有御座とハ存候つれ共
早速御心侭ニ被成御事拙者式迄難有存候此上は西国へも御遣
若ムサト仕候御事御座候而ハ千ヤクト御尋ても入候間ハ大事ノ

之御事ト承候ハヽ如何様ニも御分別ヲ以諸事可被仰付候
果目ニ御聞 今日之御被成候ト存候 譜大名流も
ツ子ミテ 無御座候 其故御法ニ仕候や 今迄ハ不任心能
御座候ニ付 此上も御分別次第ニ而被仰付候ハヽ此節ニ返
御披露可仕候 恐々謹言

伊木豊後

十二月十六日　判

尚以目出度候 以書左衛門大夫様も拙者 将又指出候 蝋燭 候龍
之御様子 御座候 今後目出度候 御代ニ今年十ケ月之内 致候
無御別 奉存候 御前之 不残 可仕候

みこゝろしとこされてよしなくそ入ぬ 日とこひハ
宮内にわりて よんそうの事ハ なけく 中将 よしなし
ひてよし
もりかへる

播广へハ輝政ノ御前へナリ 御直書仰別ニ輪ト云士ノ家ニアリ

一 私ニ曰石丸今帰同身雲徹事傳聞 輝政公三河ニ御
座被成時ヨリ御存ノ者故 播广へ御越ノ時分両人ともニ
御咄之衆ニ被召出 輝政公御国ニ被成御座時分ハ播广
へ参御参府之時分ハ 京都へ参り居申由 雲徹 知行五百石

別而御出頭仕候由或時　輝政公御入國雲徹　京ヨリ
下リ御前ヘ罷出候得者雲徹ヘ自分事於京都何ト
ヱツト御尋之時雲徹申上ルハ三左衛門殿アマリトロウ物カ
無テコヱタコノ運上マテ取被申ト沙汰仕候由申上候ヘハ以
之外御機嫌損シ座敷ヲ御立奥ヘ御入被遊候雲徹
モ戻リ居申候處翌日御城ヘ被召候ニツキ定而御手討
ニ被遊歟　只事ハ有之間敷ト存罷出候ヘハ存之外御
機嫌直リ被仰候ハ昨日ハ不存儀ヲ申聞候成程薄田左馬
申付運上取候由急度不取様申付候此後迚我等
為ニ成候事ハ遠慮ナク申上候ヘトノ御意之由

元和二、六、ノ十三ヘ

一或時伊木豊後殿雲徹ヘ被仰者兼而輝政公被仰ハ我等身
代十分一被遣ヘキトノ御約束ナリ然ニ今三ヶ國御取被遊候
ニ十分一不被下候間御機嫌ヲ見合セ此儀ヲ申上呉候様
トノ由慶長十五年輝政公江戸ヘ御参府雲徹モ御供ニテ
江戸ヘ参候ニ付折ヲ以此儀ヲ申上候成程十分一可遣トノ
約束ナリ来年播磨ヘ帰國候ハヽ於明石七万八千石可遣
候間此儀ヲ罷戻リ申聞候様トノ御使ニ播磨ヘ罷帰申達候ヘ
ハ豊後殿不成大形御悦之由然所翌慶長十六年正月廿五日
御死去ニ付其儀止ヌ残念成事ニ候
[illegible]モ雲徹御出頭仕候處池田河内殿武州公御成ノ時

別而御出頭仕候由或時　輝政公御入國雲微京ヨリ
下リ御前へ罷出候得者雲微へ自分事於京都何ト
云ツト御尋之時雲微申上ルハ三左衛門殿アマリトロウ物カ
無テコエタコノ運上マテ取被申ト沙汰仕候由申上候ヘハ以
之外御機嫌損シ座敷ヲ御立奥へ御入被遊候雲微
モ戻リ居申候處翌日御城へ被召候ニ付定而御手討
ニ被遊欤ト只事ハ有之間敷ト存罷出候ヘハ存之外御
機嫌直リ被仰候ハ昨日ハ不存儀ヲ申聞候成程薄田左馬
申付運上取候由急度不取様申付候此後迚我等
為ニ成候事ハ遠慮ナク申上候ヘトノ御意之由

一或時伊木豊後殿雲微へ被仰者兼而輝政公被仰ハ我等身
代十分一被遣ヘキトノ御約束ナリ然ルニ今三ケ國御取被遊候
ニ十分一不被下候間御機嫌ヲ見合セ此儀ヲ申上呉候様
トノ由慶長十五年輝政公江戸へ御參府雲微モ御供ニテ
江戸ヘ參候ニ付折ヲ以此儀ヲ申上候成程十分一可遣トノ
約束ナリ来年播磨エ帰國候ハヽ於明石七万八千石可遣
候間此儀ヲ罷戻リ申聞候様トノ御使ニ播磨エ罷帰申達候ヘ
ハ豊後殿不成大形御悦之由然ル所翌慶長十六年正月廿五日
御死去ニ付其儀止ヌ残念成事ニ候

一武藏守様エモ雲微御出頭仕候處池田河内殿武列公御成ノ時

雲徴御相伴ニ参筈ノ処武州公御成候テモ不参御勝手ハ能
候ニ付御膳可出カト伺候ヘハ雲徴参候ヘト出シ候様トノ儀ニテ雲
徴エ矢ノ遣ヒ参候テ漸ニ参御膳モ出御機嫌モヨク相濟候其後
武州公御逝去以後河内トノ雲徴ヲ御ニラミナサレ候ニ付腹ヲ立御
家立退申候雲徴世悴長三郎ト云アリ是ヲ豊後殿トメ不見性ニテ
召遣レ候或時長三郎ヲ豊後殿呼候御指料ノ刀　被遣此日
供ニ参候何ト申中間不届者ニ候間此庭エ呼ヘ候テ討テ
捨ヨト御申候ニ付右ノ中間ヲ御庭ヘ呼入御意ノ趣ヲ申渡候
ヘハ大脇指ヲ抜候ニ付長三郎モ拝領ノ刀ニテ暫ク切合候テ
終ニ切伏トヾメヲ指刀ヲヌクヒ座敷ニ戻リカヨヒヲ仕候由豊後
殿碁ヲ搏御座候處其方ヘ一度モ見ムキ不被成由長三郎
後神ノ何某家養子ニ参後神權大夫ト云其子勘平其ハ後市兵衛ト云
子今佐右衛門ナリ

元和元、夜

一〔貼紙下〕又次郎母我等若キ時咄被申候ハ大坂夏陣時分
武州公御出陣ヲ姫路一ノ郷渡シノ向ノ山ニ居テ見物仕ル由何
モ陣羽織ニテ指物ハ銘々ニ持セ武者押ノ由扨大坂五月七日
落城ノ後ヰヒキ歌ハヤリ候トテ被申聞
一七日ノヽハ多ケレトウイモツライモ五月の七日親ハ子ヲ捨子ハ親ヲ
捨イトシ殿子ハ江戸衆ニ捕ラレサツキ花カヤチリ〳〵ニ
又被申シハ其比マテ布ノサイフニ白米五合ト鳥目百文ツヽ家内ノ

一雲徹御相伴ニ参筈ノ処武列公御成候テモ不参御勝手ハ能
候ニ付御膳可出カト伺候ヘハ雲徹参候ヘト出シ候様トノ儀ニテ雲
徹エ矢ノ遣ヒ参候テ漸ニ参御膳モ出御機嫌モヨク相済候其後
武列公御逝去以後河内トノ雲徹ヲ御ニラミナサレ候ニ付腹ヲ立御
家立退申候雲徹世悴長三郎トテアリ是ヲ豊後殿トノ小児性ニテ
召遣レ候或時長三郎ヲ豊後殿呼候御指料ノ刀 被遣此日
供ニ参候何ト申中間不届者ニ候間此庭エ呼ヘ候テ討テ
捨ヨト御申候ニ付右ノ中間ヲ御庭ヘ呼入御意ノ趣ヲ申渡候
ヘハ大脇指ヲ抜候ニ付長三郎モ拝領ノ刀ニテ暫ク切合候テ
終ニ切伏トヽメヲ指刀ヲヌクヒ座敷ニ戻リカヨセヲ仕候由豊後
殿碁ヲ搏御座候処其方ヘ一度モ見ムキ不被成由長三郎
後神ノ何某家養子ニ参後神権大夫トニ其子勘平其ハ後市兵衛ト云
子今佐右衛門ナリ

一神屋親久次郎母我等若キ時咄被申候ハ大坂冬陣時分
武列公御出陣ヲ姫路一ノ郷渡レノ向ノ山ニ居テ見物仕ル由何
モ陣羽織ニテ指物ハ銘々ニ持セ武者押ノ由扨大坂五月七日
落城ノ後ヨヒキ歌ハヤリ候トテ被申聞

一七日ノハ多ケレトウイモツライモ五月の七日親ハ子ヲ捨子ハ親ヲ
捨イトシ殿子ハ江戸衆ニ捕ラレサツキ花カヤチリ／＼ニ

又被申レハ其比マテ布ノサイフニ白米五合ト鳥目百文ツヽ家内ノ

人数ホト入候テ柱ニカケ置陣ト申セハ其ノ侭銘々ニ持候テ退
候由
一小幡勘兵衛殿弟子吉川道喜佐々淡路守殿家来次男土倉淡路ト人
縁アリテ岡山ヘ参リ小幡流ノ弟子アリ我等若年時甲州流
一通道喜ニ承リ候道喜物語大坂冬陣ノ時分ハ勘兵衛
殿板倉殿御下知ニテ大坂ヘ計策ニ入被申候処ニ粗顕レ候
趣ニテ天満ノ町屋ノ二階ニ被居申番ノ付キ候道喜モ一
所ニ居申時勘兵衛殿滝川一盃甲州ニテ被取巻候時十二
心モナク小鼓ヲ陣屋ニテキレ候思召出サレ小鼓ヲ搏被申候
ヘハ番ノ者計策ノ人ニテハ無之ヤト油断ノ時二階ノ窓戸ヲヤフリ

京都ヘ退被申シト云後板倉殿ヨリ勘兵衛殿事被申上候ヘハ
東照宮被仰候ハ勘兵衛ハ計策ニテ無之ヒ致様ハ可有之ト被仰
候由秀忠公勘兵衛思召能御旗本ヘ被召出候由扨道喜
物語夏陣ニハ佐々家ニテ出陣被致候用銀指テ入不申由
陣中ヘハ酒餅ヨリ外賣物ハ不参候由出陣前ノ用意ノ
入用ハ格別ナリ道喜鳥目四貫文持参ノ所帰陣ノ時ハ八
貫程ニ成候由咄ニ候
一大坂天王寺表越前之少将殿騎馬七騎計小円居ヲ為
持小具足計ニテ中物見被成候ヲ見及申由道喜咄テ候
一大坂夏陣ノ時道喜少々心馳有之由勘兵衛トノ感状

一可被遣トノ事ニ候ヘ共入不申由ニテ不申ノ請後悔ノ由少知
ニテハ有之候ヘ共千石ヨリ内ニテハ不出由一生牢人ナリ

一　今川了俊ノ咄

山名修理大夫常ニ申サレシハ子孫ハ朝敵トモ成ヌヘキモ知レス
其謂ハ我ハ建武ヨリコノカタ當御代ノ御陰テ人ト成元弘ヨリ
以前ハ只民百姓ノ如クニテ野刈ノ山市ト申所ニ侍リシカハ渡世
ノ悲シサモ身ノ程モ知リ又ハ軍ノ難儀ヲモ思ヒ知リニキサレハ
御世ノ御恩ノ忝事ヲモ知リ世ノタヽスマヒモ且辨ヘタルタニ折ニ
フレテハ上ヲモ疎ニ思ヒタリ人ヲモ鄙シク思フニ付テ知リヌ子孫ノ世
ト成ナハ公ノ御恩ヲモ親ノ恩ヲモ知ラス己ヲノミニカヽヤカシ過
分ニノミ成行ヘキ程ニ我意ニマカセタランニハ御不審ヲモ蒙
ルヘキ也ト子息達ノ居給フ所ニテノ申サレケリ

一　伊木家ニ太閤より書状ノ写

態申遣候、河木村隼人此方へ罷越候城中請取候て在之
二之丸ニ在城相定候、女房衆をも城よりつれ出候自然
為体如何と候ハ、甚可罷出候、留守ニ不及候、よく〳〵又此方ゟ人を
差遣候て段々時分を以て何も無油断様ニ可申付候、各曲事ニ付候ハヽ可
申付候也

四月十二日　秀吉　御朱印

伊木長兵衛尉とのへ

此状ニ被成候ハ御所ゟ孫七郎以前ゟ大様へこし御申越候

一 測保城普請丈夫ニ申付由候而可被申届ゟ猶以此由左様
其方儀ハ自然中付万事可申越候又ハ其様子可申越
可申越候得共無人ニ候ハヽ加勢も可遣候先年も
委細申候間其方次第たるへく候

一 いよいよ付森寺在之由候而即折紙書状判別而入精
候ニ尚々可申候事

一 其方儀甚存大様ニ候得共爰元之儀丈夫ニ申付候事
この由城之儀事可申候而可被入之由候

卯月十二日

筑前守
秀吉御判

伊木長兵衛尉殿

一 其状ニ被成候ハ此人質共何茂入念可申付候其
可入質物とも相定而猶々可申付萬事気遣
所要ニ尚追而可申候也

卯月廿二日

筑前守
秀吉御判

伊木長兵衛尉殿

一 其状申越候事康様頼候事ニ候人質請取
猶以此由候間可申候

然而

一 此状ニ候長島兼而押付城ニ相入候而折紙縄生城ニ

一 秀吉と此四年長陣へ出中付かれ御出信雄にハ見及能
懇望之間令赦免之事

一 人質之儀信雄御実子并源五殿実子滝川三郎兵衛尉中川
勘右衛門佐久間甚九郎土方彦三郎松浦以下何も実子又ハ
母なと人質何様にも一の為秀吉次第と申誓紙申上候

一 北伊勢四郡相渡今度相越候ハ敵味方破却之事

一 於尾州之内犬山甲田秀吉人数入置候新城ニ相残候
之敵味方破却之事

一 家康儀是又因茲懇望候間今度信雄若人を引入
対秀吉年々二而御使候之条既ニ可相表押詰候へ共
覚悟之由家康実子石河伯耆以下出人質何様ニも可為
秀吉次第由候信雄以外ニ少も候旨信雄懇
望之上ハ秀吉対家康存分深候思案未届開ニ
免候処日本之儀無念館而取角打任候もと
少之儀ハ我く慈悲をも可加候而聞届之事ニ而先以可弛心中
難申之事

一 右之分ニ候へハ其陣可之条為三日中ニ納候て可打返候て
ゆしや

十一月十三日

秀吉御朱印

伊木長兵衛尉殿

於濃州所知方知行目録写并有之事ハ前判之通全之写也

天正十七

十一月廿一日　御朱印

伊木清兵衛尉殿

所付之目録

伊木清兵衛尉直末

一　六百四十石七斗　小とひ
一　三百四十三石六斗三升　小舟家
一　三百卅一石八斗　南舟家
一　二百四十七石四斗四升　あさひ
一　四百九十四石九斗九升　本の村
一　八百四十八石三斗弐升　竹ヶ鼻
一　弐百六十二石六升　ましま
一　五百九十石　小熊村　三分一　あくかしら共
一　三百十九石一斗七升　なか池
一　弐百十二石弐斗五升　小志ゆく
一　七百五十石三斗六升　南志ゆく　いんき共

合五千石

天正十七年十一月十四日

石田治部少輔　在判

浅野弾正少弼　在判

右之役諸下候也

名判奥書八自筆ニ而御座候

蟲明八景 為備前州宰賦

迫門黎明

海口在郡治東南長島舊有居人千餘戸舟行出乎此則東接壇島西望扇濵琴浦等所

海門煙霧斷微渺望滄溟日湧雲霞赤天涵島嶼青扇濵懸落月琴浦散稀星欲盡東南美層樓倚窈冥

裳掛殘月

石在治南海上舊傳飛鳥姫沉水之日衣佩漂来掛于此石去石數十歩有深淵名曰龍宮城邑人遇旱則禱往往有驗

金樞残月落碧海氣蒼々龍府珠輝冷蟾宮桂子香
波明神女戰霓舞素娥裳誰挽天河水頻添玉漏長

玉葛晴雪

山在治西其山最高登臨則四境在
目中去山里許有馬冢蓋神后征新
羅之日海九助者埋其乗馬所也

西峯明霽色積雪掛雲端影動金烏曉光鎖玉馬寒山
陰詠叢桂郢裏奏幽蘭坐向瑶臺上誰披鶴氅看

橘山鹿鳴

山在治之東北西谷曰鹿口鹿口西
上則有城墟

黄橘霜飛日丹楓露下秋林間時濯々谷口自呦々鄭國
蕉成夢呉城草亦愁嘉賓堪可樂更為皷琴留

舟越帰帆

濵在治之東南昔有鱸户

長烟鱸户暗帆落夕波中南北常占斗東西只任風掃雲
千片白掛日一輪紅為問鱸魚膾歸心想未同

扇濵夕陽

濵在治之東南飛鳥姫作歌題扇
投水而死其扇所止也

落日層波動蒼茫海甸分雲如飄畫扇水似泛紅裙
虹霽連輪出霞沉反影曛乗鸞人去後歌怨不堪聞

黒井晩鐘

山在治北山上有寺曰等覚有殿
奉大悲像殿之東南有泉而出焉

水色常黒西北去殿四五百歩飛瀑
雙落青山湧乎其中下抵嵓下而合
流
寶塔慈雲暮華鐘慧日沉憂添天籟響遥動海潮音
崖拆銀河落泉通黒水深諸方皆善應須發菩提心

唐琴夜雨
浦在治南西望則牛窓燈火杳明
亦曰唐泊蓋海舶之所會也
夜雨鳴琴浦聲々曲裏傳清風廻玉軫流水入朱絃
燈暗燃犀渚篷遥孤載鶴舩遥識神明宰應如子賤賢
右着荒井筑後作白石詩草之内ニ有之

寛保二壬戌歳十月六日関東筋所々御普請御手傳
松平大炊頭様　松平大膳大夫様　毛利吉川龍京
細川越中守様　藤堂和泉守様　阿部伊勢守様
仙石越前守様　京極佐渡守様　伊達熊次郎様
稲葉万二郎様　間部若狭守様
右之通ニ御目見被仰付候而御勘定奉行神尾若狭守
水野對馬守ニ而ハ相勤候由且又右衛門之儀松平右近将監へ
被仰付候間

一 戌八月朔日江戸本所深川浅草邊洪水ニ付町家人其外町人
百姓共 同四日ゟ十一日迄御救ひ焚出しニ而御手當人数左之通
合拾八万六千四百人余
右者堀町吹屋町かやば町南通橋表通り茅屋迄之所
仝日毎日焚出し仕船数艘ニ而運ひ遣
一 流家潰家壱万九千弐百八十五軒

一 溺死人千五十八人　溺死牛馬千七百七拾九疋
一 水場所ニ而被損所書上
玉川筋ゟ村々田迄十三り　荒川万吉ゟ小梅迄五り
右メ三十五り
神流川星石ゟ笛木新田丁町迄四里　上利根川戸谷塚ゟ関口村迄十六り
烏川藤谷ゟ倉村迄五り　元荒川新宿ゟ越谷迄十二り
右メ三十七り被損
江戸川関宿ゟ行徳迄十五り　古利根川川口沼井ゟ猿ヶ俣迄七り
後瀬川上滝書ゟ角田川迄九り　中川猿ヶ俣ゟ砂村迄六り
横川　中川豊乃ゟ今井迄一り

右〆二六十八り
渡良瀬川　田中ゟ高いせ十ケ村　権現堂川　栗橋ゟ関宿迄三り
赤堀川　大山ゟ境橋迄二り　白河迄　佐利ゟ栗橋迄四り
嶋中川迄　伊坂ゟ栗橋迄四り　黒川　ゟ河上村ゟ築地迄七り
右〆二十り
下利根川　布佐ゟ佐原迄十り　思川　中ゟ栗橋迄拾り
小貝川　川中子ゟ羽子田迄十五り　新利根川押付ゟ河橋迄八り
右〆四十三り
一　右被相願候川々御普請積り委上
一　竹木諸色代
六千四百九拾七両余
人足賃
壱万六千四百七拾両余

右ハ武州荒川星川元荒川　此代官　栗田庄太夫組
右口り
八千四百九拾両
右口り
壱万六千三百両余
右ハ常陸下総之内鬼怒川小貝川新利根川　此代官　蒲田孫兵衛組
右口り
五千五百八拾両余
右口り
九千八百六拾両余
右ハ下総常陸内下利根川　此代官　東新六郎組
右口り
壱万千四百三拾両余
右口り
三万六千百八十両余
右ハ武州上州利根川渡良瀬川之支　此代官　千藤一大郎組
右口り
壱万六千四百五十両余
右口り
五万千五百七十両余
右ハ武州星川葛川元荒川芝川通リ之支　此代官　伊奈半左衛門組
惣合五拾五万七千九百両余

内　七万四千弐百両余　竹木諸式代
　　拾八万三千四百両余　人足賃

右此度御普請ニ付御役人

惣奉行
御老中　松平右近将監様

御若年寄　本多伊豫守様

神尾若狭守様

御勘定奉行　水野対馬守様

御勘定組頭
八木半三郎様
吉木次郎九郎様
堀江荒次郎様
諏訪又八郎様

支配勘定

御目付場所見廻り
佐々源兵衛様
中山五郎左衛門様

御代官
原新六郎様
前沢万五郎様

御勘定之流
伊藤兵九郎様
諏訪新六郎様
本多角十郎様
野田政右衛門様

右御役人之内御目付衆中山出雲守始諸手前之目付十二人
其外諸役人大勢役所御仮小屋ニ而今二夜此節迄相詰
御用勤候

一御普請御役掛り松平右近将監様ニ而御取扱之
此度之御普請被仰付候ニ付此度者是迄村々ニ而百
姓共も被仰付候得共此度之儀ハ当地町方之
者入交りニ而ハ給金等も少しも相違無之様ニ被仰付候
論当地町方之人足請負人共之内ニ而も神尾
若狭守様へ御願申上候而御普請相済候迄ハ
江戸ニ而も承り候者も

戌十月

御手伝御大名御場所割并諸手御目付

三拾壱万五千五百石　松平大炊頭様

御目付　加藤左之助様

多賀外記様

上利根川　小山側　烏川　神流川　渡良瀬川

三拾六万九千八百石　松平大隅守様

御目付　戸川内蔵助様

筧新太郎様

上利根川　吉川左京

吉川左京　御手伝場所之儀ハ去ル寅不調ニ付次第ニ而

渡辺大隅守様へ被仰付

拾四万石　細川越中守様

御目付　池田彦太郎様

酒井金三郎様

江戸川　庄内古川ト中川　綾瀬川　古利根川

三拾壱万二千九百六拾石　藤堂和泉守様

御目付　松本隼人様

花房五兵衛様

栗橋御関所前橋　中川　向河原　細谷川　黒熊川　権現堂川

赤堀川

十万石　下利根川　阿部伊勢守様

二万八千五百石余　小貝川　仙石越前守様

五万石　新利根川　阿部豊後守様

右同断三人ニ而御付ケ　菅沼岩三郎様

神田平吉様

五万石　京極佐渡守様

荒川芝川とも　星川　元荒川

五万八千石余　荒川　伊東総太郎様

五万二千石　荒川　稲葉万次郎様

右同断　右三人ニ而御付ケ　奥山喜三郎様

久野三郎兵衛様

武州星川元荒川通り　伊奈半左衛門支配

此積り金高八万二千五百両余

武州上州利根川　烏川　神流川　上利根川

同　六万七千五百両余　石原清左衛門支配

下総常陸下利根川　原新六郎支配

同　壱万千五百両余

武州荒川　并星川　元荒川　柴村藤右衛門支配

同　弐万三千五百両余

常陸下総境忍川新利根川　幸田兵庫之丞支配

同　弐万五千石余

下総常陸下利根川　佐藤万五郎支配

同　三万六千石余

〆壱万弐千石余　惣〆勘定合金高弐千両未付候

〆弐拾五万七千五百石余

内

公儀ゟ　七万四千石余　竹木代金払諸色代

御手伝ゟ　拾八万三千五百石余　人足代

但シ一日壱人七合ツヽ積り合米壱人合ニ積る也

右之通戌九月廿九日ゟ勘定所右代官方ゟ相積り申出候ニ付

写し

此方様役人

惣奉行　銀五十枚　時服五ツ　池田勘解由

添奉行　銀三十枚　時服三ツ羽織一ツ宛　服部図書　丹羽蔵人

本〆用人　時服二ツ　銀九枚　羽織一ツ　宛　森半左衛門　安東七郎太夫　九毛治右衛門

留主居　銀九枚羽織一ツ時服二ツ　水野七郎右衛門

目付
銀弐枚時服二羽織一ツ宛
神屋久二郎
薄田兵右エ門
普請奉行時服二ツ宛
銀十枚
羽織一ツ
八木惣兵衛
中村久兵衛
林傳内
浦上十右エ門
御普請所村附
御普請役
場所奉行
附
岡田央惣右エ門
上利根川通
津田傳四郎
中嶋村 平塚村 徳川村 亀岡村
福島四郎九兵門
阿久津村 武蔵嶋村 前嶋村 堀口村
髙橋鍋太郎
押切村 小嶋村
寺尾央右エ門
髙田弥一郎
嶋村
鹿嶋弥九兵門
加藤藤十郎
門田六之丞
小野田儀之介
長沼村 冨塚村 戸ノ谷塚村
田部井幾八郎
下福嶋村 八斗嶋村 飯嶋村
林要藏
小柴村 上仁手村 下仁手村
長田丈右エ門

利根川通

川俣村　梅原村　須賀村
大崎村　中谷村　大佐賀村
長手村　大嶋村　吉澤村
張戸村　鶴生田村　丸山村
舞木村　古海村　内ヶ嶋村
赤岩村　坂田村　仙名村
上小泉村　飯塚村　下小泉村
上五ヶ村　瀬戸井村　古戸村
上中森村　鍋谷村　下中森村
斗合田村　江口村　千津井村
飯野村　八重笠村　萱野村
冨田村　新宿村　若林村

安井儀平
片山金大夫
上岡典六郎
藤橋武介
古澤清之介
竹内團介
須崎庄右衛門
友松長兵衛
佐々軍治
早川甚兵衛
関口鎮介
村井八郎右衛門
馬場清九右衛門
那須久大夫
平田小平治
大原作十郎
上岡八三郎
嶋田善介
三木勘五郎

江黒村　赤生田村　石打村
大ノ郷村

渡良瀬通南
下五ケ村　大久保村　南大嶋村
高取村　藤川村　中野村
里矢場村　本矢場村　三ツ堀村
矢ア村　鶉村　島村
海老瀬村　坂倉村　秋妻村

離村　西岡村　荒分村
龍舞村　沖ノ郷村　除川村
大橋村　只上村　谷越村
矢田堀村　大新田　嶋田村
下小林村　矢場
西岡新田村　北大嶋村　木戸村
高根村　新嶋村　日向村
野田村　梁田村　荒井村
荒萩村　小曽根村　縣村
今井三ケ村　羽苅村　百頭村　中里村　飯田村

三谷田理左エ門
岸本文右エ門
小野傳左エ門
石川与八郎
金子甚七
近藤七介
井上弥一兵衛
横山兵大夫
田部井源介
山川儀兵衛
高取喜兵衛
神屋茂大夫
原田喜左エ門
在津市左エ門
早川幸右エ門
津村吉右エ門
高留惣七郎
黒田豊覚左エ門
平野半兵衛

日本政府圖書
国立公文書館 National Archives of Japan

市場村 借宿村 今泉村 大田四ヶ村 上濱田村
西矢嶋村 下濱田村 今井村 大田町
借宿村 田中村 高松村
小生川村 高林村 神明村
植木野村 猿田村 上渋垂村
下渋垂村 朝倉村 鷹田村
岩田村 一本木村 上士林村
市場村 海老瀬 内藏新田
野原村 木崎村 別所村
吉田村 古氷村 小舞木村
新福寺村 東矢嶋村 口ノ上村
茂木村 傍示塚村 田嶋村 下三林村
上早川田村 下早川田村 藤本村 上小林村
羽附村 入ヶ谷村 南友ノ郷村 籾谷村
田谷村 矢嶋村 北友ノ郷村 八幡村
四ッ谷村 青柳村 當郷村 上鳥山村
中鳥山村 下鳥山村 新當郷村 茂手木村

栗原平次郎
相澤定六
杢山平兵衛
石原兵八郎
安倉十左エ門
飯村忠右エ門
中丸左四郎
正田孫右衛門
小牧友之丞
櫻井助太夫
吉田九郎左エ門
西村忠藏
荻野藤市
伊能四郎左エ門
青江金次郎
小谷主丞
駒田半次郎
大森太郎左エ門

堀工村 足次村 赤堀村 鍋谷村
堀込村 福嶋村 篠塚村 大町村
狸塚村 新里村
上廣沢村 中廣沢村
下廣沢村

渡良瀬川通北

足利

五ヶ新田町 五十部村
今福村 山下村
大前村
川崎村 粟戸村
羽子田村 鵤木村
常見村 村上村

若山忠蔵
小室弥九郎
野口弥一左衛門
臼杵平介
難波九太郎
大塚善治
富岡勘右衛門
大塚八郎右衛門
的場六太夫
瀬嶋六兵衛
若林伝九郎
中西八十郎
平岡直右衛門
安達清右衛門
磯部文右衛門
尾沢文吉

高橋村

岩井村　勧濃村

葉鹿村　小俣村

新宿村　境野村

船津川村　君田村

田嶋村　馬門村

庭谷村　只木村

荒井村　藤岡村

鳥川通

松村甚右衛門

田嶋清蔵

岡本弥四郎

此不
冨岡勘右衛門　兼役

渡辺利右衛門

三宅重三郎

中塚吾内

此不
大塚吾次　兼役

中嶋治吉

中村安之丞

入沢市之丞

新藤丈太夫

川嶋宇右衛門

石尾善左衛門

石川藤大夫

岡吉之丞

加藤用右衛門

高木久兵衛

徳山兵蔵

渋谷安太夫

松野安之介

藤井唯十郎

神・淀川

上忍保村　代黒村　呉沢村
仁手久々宮村　田中村　東庄村
八町河原村　新井村　小和瀬村
山王堂村　一本木村
留木新町　勝場村　金久保村
長浜村　上ノ宮村　四軒在家村
安保村

落合新町　上戸塚村
下戸塚村　岡ノ口村
角淵村
小浜村　小林村　東口村
児石村　肥土村　渡瀬村
森新田　浄法寺村　立石新田
保美村　中嶋村　牛田村
川除村

横江忠助
川崎九郎太夫
吉川彦五郎
舟木文六郎
西嶋庄介
鶴田源五郎
伊東逸八
谷川次郎左衛門
加藤文治
四井彦太夫

柏木勇七
成瀬吉郎右衛門
谷川数傳郎
横山三郎兵
高田喜兵
鈴木庄助
新藤儀助
榎並新内
山本文三郎
中村彦三郎

狂哥

水上ハ池田ノ大イ場所ナレトイカナ切レトモ金ノツリマサ

藤堂ノ所ヨコヘテヌケチ傳金ハ和泉テ銭ハ出カ子ル

細川カ大キナ川ヲ請取テ越中フトシヌレテア御難儀

寛保三亥閏四月十二日

御書院松之間 御着座豊後守を以御料理被成下候

御趣意之段難有奉存候旨申上ル 此時月番越中守ヲ以御請申上ル

通 御意之趣重キ御用首尾好仕廻候様ニ御懇意之

上意を蒙難有事ニ候 左様ニ候得ハ何事も志ヲ出シ可

之別る満足ニ候 依之猶以倹約之事今度申渡候事ニ付

勤候 此事付ても下方ニ付御書付出候様ニ被仰付候ニ付陽り

之ハ何とぞ倹約を可致候様ニと趣も有之候 若年寄中申出

土地之義も文之通ニ可致 此度之拙文故ニ寄申上候節も倹

約堅可相守候ハ 難儀甚ニ存候 せ 通中事無之上ニ

役分ニ不成様ニ読ミ此段ハ家臣共ニ申聞セ候而御取扱ニ可申
庶の老中ニ致させ御請ニ而其儀ニ被及候事ニ候の儀也
おゐてハ何も志ニ而不足ニ也とみへ料理なとも無事ニ候
又も當世の調ニ而御稽古老達之人ハ其節ニ當申候へとも以來迄中
次ニ不諸家共ニ之儀も可致見物ニ可被申候分御心得可有之

右勤務中諸く

又御前ニ罷出候ても御意ニ而御前中にて此段ハ事ニ候故諸く
達人ハ年寄共ニ右の段省略之人ハ城内之事人抔之趣を不存ニ候而
為ニよろしく御無事も一ツの家にて其心得可被成候御申付下候
頭る私家来共ニ神家来不得手の様ニ堅く無用ニ可申付候
何とかく申ニ付御取違無之様ニ被成候ハ及ん右ニ准し町
者之者共ニも町役家ニ相様ニ郡代町奉行分ニ可申付候

右勤務中諸く

又御意
當代ニ移り時節も次第ニ家中ニて若者を育る事ハ世に見て皆
其世之成別ニ気色ニ見へ候而其人を教ても諸ニ放埒
ニ志中おとへ候様の分ニ思ひ候不得手の身ニ一ツ事ニ思
ひ候様之御遠慮ニ付可有之候人ハ納古く気も持ち乍も思ひ

已上

継政公三ッ物

国民の志をさしおくの才するも余りくられしき

のまヽ

甘棠乃本段やかうはし茂の蔭

四方よ餘ふ玉乃苗

ふれしくを志ふ白れうましもそ

継政公瘧御振ゟ遊候て

大森太郎神ニ奉納　よミ人不知

まえく玉札のまかやりよたまふ大森の神おくは神

一　寛保元酉ノ蓄狂歌之事

無ニ入く猶約諸御の福田の事も

毛角出て為す病に物入人家の志ゟ御ニ成

ともに済て見ゐ志ゟ甚我の其

今より此段ゟありまんやよ会添て

右のよる此段も今ハ出る利を施や

御池にも済し文ゟ出て滅ゟ申刊

寛保二戌年十月之仰事

並ニ備出る文公勢物ゟ加てハ済倹約ゟ

第一謹慎者勿論之事ニ候得ハ神職役人堅可相守者也
其心得可在之古例ニ而も斎席之次第ニより何ニよらす猥之儀より
ハ被仰付候ニ付猶又申付候而ハ不七年ニ而も大切之儀倹約之儀ハ
不締ニ無之候由を可謝其上ニ而も急度難年存候故格別
ある申及候事段々懇念及熟談候ハ万一之勿論之事ニ付何事
相定ニ而被仰付ニ而も此段相守之儀倹約之儀ニ心を用ひ急度可相守候
を以ニて可申思候

寛保三亥十一月

入江三河守
敏貞

一 奥様方御法納御進物

一 白さはや　十反
一 紅さはや　十反
一 杉原　十把
一 干鯛　一箱
一 昆布　一折
一 するめ　一折
一 御樽　三荷

右大府様より其姫様へ

一 御太刀　杉繻
一 御馬代　銀二枚
一 干鯛　一折
一 昆布　一折
一 御樽　一荷

右大府様より殿様へ

一 杉原　五把
一 昆布　一折
一 御樽代　五百疋

右大府様ゟ若殿様へ

一 御紋上下　　大右府様ゟ岑次郎様へ

一 巻物　二巻　一 干鯛　二箱

右関白様ゟ喜姫様へ

一 絵讃物　三幅対　一 干鯛　一箱

右関白様ゟ殿様へ御かた見ニさしへ

一 謡書　一組　一 干鯛　一折

右関白様ゟ榮光院様へ御かた見として

一 御人形　一組　一 干鯛　一折

右関白様ゟ峯次郎様へ

一 御紋上下　　大五百様ゟ

殿様　榮光院様　若殿様　喜姫様

一 御手箱内ニ御人形入　大五百姫様ゟ喜姫様へ　但女中方ゟ

文ニ而御聞ニ入らせ候

一 干鯛　一箱　一 こんぶ　一箱

一 御樽代　三百疋

大右府様ゟ内匠頭様へ

一 太刀　太刀　丹波守様へ

一 太刀　信濃守様へ

一 干鯛　一箱　一 御樽代　三百疋

大右府様ゟ和泉守殿へ

一 御鼻紙　一束　御添者
　関白様ゟ御近衛様、御息女様ゟ
一 右同断　同断　丹波守様、
一 右同断　右同断　信濃守様、
一 御書　一巻　包のし
　関白様ゟ和泉殿、
一 御酒上斗
　五百姫様ゟ　御近衛様、丹波守様　信濃守様

御巡見御国目付之覚

一 天和二壬戌歳御巡見高木忠右衛門殿　服部久右衛門殿　佐橋甚兵衛殿

一 宝永七庚寅歳八月十五日備中西阿知ニ御泊り御巡見黒川与五兵衛殿　森川六左衛門殿　岩瀬吉左衛門殿　同月十五日黒山ゟ御泊り同廿四日ニ而泊り同廿五日播州へ御移り

一 享保二丁酉七月十四日備中西阿知村御泊り御巡見松平与左衛門殿　落合源右衛門殿　遠藤源五郎殿　同月十八日黒山ゟ御泊り同廿二日ニ而御泊り同廿四日播州へ御移り

一 正徳五乙未歳三月廿七日御国目付曽我平次郎殿　中野左

右膳殿岡山御城内山下ニ御住宅同九月五日岡山御立
江戸へ御帰り

明治十年四月岡山縣ニ托シ其蔵本ニ就テ
鈔寫セシム

日本政府圖書
圖書局文庫
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan